



TITLE:

# 大阪府豊能郡麻田村産舊[象]牙化石 と其の層位

AUTHOR(S):

上治, 寅次郎

---

CITATION:

上治, 寅次郎. 大阪府豊能郡麻田村産舊[象]牙化石と其の層位. 地球  
1933, 20(6): 444-449

ISSUE DATE:

1933-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184234>

RIGHT:

## 大阪府豊能郡麻田村産舊象牙化石と其の層位

上 治 寅 次 郎

## 一、發掘の位置

昭和八年三月十八日、大阪府豊能郡麻田村大字麻田に於て、大阪府産業道路大阪池田線の切取工事中、青粘土の厚層中より舊象牙の化石を發掘した(第一圖)。發掘位置は大阪寶塚電車線の螢ヶ池停留場より南東約二三〇米の附近であつて、四近一帯は五〇米以下の低き丘陵をなしてゐる。この丘陵の南端は約三五米の高さを有し、半島狀に麻田部落の南東の冲積低地(二〇米以下の平地)に斗出し、その尖端は約四〇年前に道路開鑿のため約九米を切り下げ、更に明治四十三年頃大阪より寶塚に至る電車を通ずるために切取を擴張し、更に又、本年初めより着手されたる大阪府産業道路工事のために一米乃至三米の切り下げ工事を行つた。然るに工事中、偶然に舊道路面下約二米前後の青粘土中に横はれる舊象牙の化石を發見した。發見當時はこれが何物なるやを知らず、土と共に他に運搬されつゝあつたが、石川文彦氏・宮竹介治氏等の盡力によりて破片を集め、保存されるに至つたのである。從來瀬戸内海沿海地方で屢々象齒其他舊象化石が發見されて居るが、層位の不明な

# 第一圖

## 麻田村產舊象牙の化石

(全長一四〇・九糎)



ものが相當に多い。今回の層位は明瞭であるが、牙のみで齒が発見されない。石川氏の談によれば、白齒らしいものも發掘された疑もあるが、土工の人夫等は岩石なりと誤認して他に運搬し、埋没したかもしれないことである。茲に牙の記載と層位のみを記述して研究者の參考に供する積りである。

### 二、發掘の象牙化石

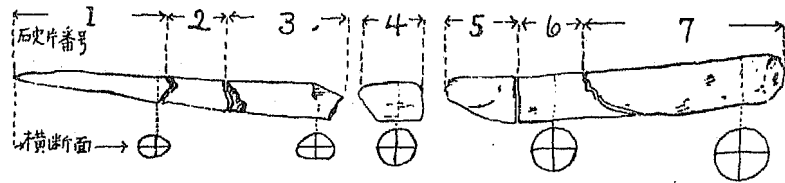
發掘された象牙は第一圖に示すが如き形をなし、地層中に埋没せる間及び發掘中に截斷されて七個の小片となつて居る。各片は大體に於て接續するも推定約一八糎は失はれて不明である。この部を合せて全長一四〇・九糎、屈曲に乏しきも、多少彎曲し、舊象牙化石としては小形なもので最も太い部は周圍二九・三糎、漸次に細くなり最も尖端の部は鈍く尖つて居る。表面には蒸皮狀に藍鐵礦附着して藍黑色を呈する部もあり、褐鐵礦のために赤褐色となれる部多く、多少象牙質の部分も窺はるゝが、多くは石化し、褐色・灰色を呈して居る。

第二圖は發掘されたる象牙の見取圖で、先端は破片第一で長さ二五・五糎、彎曲の少なる牛角狀をなし、破片第二との接合部は天然に折れて居た如く、破面は大部分酸化鐵によつて染められて居る。破面の中央には小なる穴があ

## 第二圖

### 象牙の取見たる發掘圖

(全長一四〇・九糎)



る。破面には恰も布目状を呈せる凸凹を見る。断面は卵形をなし、横五・二糎、縦四・二糎ある。破片第二は長さ一一糎、断面は卵形をなし、表面部は一糎の白色部あるも、約一糎は黒褐色部となり、内部一・七糎は茶褐色となる。布目状の凹凸は破片第一と同様なるも、大體同心圓狀をなし凡そ六十を算ふ。破片第三は二〇・四糎、兩端共に發掘の際破砕されたるもの、如く、破面は新鮮である。断面は三角形に近い楕圓形をなす。破片第四は一端は發掘の際に破砕され、第三破片との間約八糎は失はる。他端は天然に切斷されたるものにして破面平滑、中央に小孔を有する。断面は徑七・三の圓形をなす。第五片は長さ一一糎、第四片との間約一〇糎位失はる。他の一端は平滑に破砕され天然に切斷、横断面には布目状の凹凸あること他と同様、周邊は同心圓狀をなし約八五乃至九〇を算する。破片第六は長さ一二糎、圓形の断面を有し、表面部は珣瑯質部一糎位あり、他は褐色となる。断面の中央部は破壊されて徑約一・五糎の孔がある。破片第七は長三三糎、断面の徑九・〇糎、中央に孔隙があつて、徑二・五糎である。象牙の形と断面の狀況より推定して、以上七片がこの象牙の殆んど全部であると思はれる。

以上、七片に破砕さるゝも、第四破片の兩端に接合する部分の失はる

ゝ外は全部完全に接合することが出来る。破片第六片は宮竹介治氏、他の六片は石川文彦氏の保存にかゝるもので、共に目下京都帝國大學に保管されて居る。各片の測定は第一表の通りである。

### 三、層 位

象牙の存在せし地層は青色粘土層又は泥板岩とすべき岩層にして、乾燥せば灰白色の堅き土塊となる。踏査の當時は既に一部は石垣にて卷かれ居りたるも、概測の厚さ九米、下は砂礫層となる。化石の存在せるは青色粘土層の下底より約一米上方附近であつたらしい。化石の横はれる層位からはドブシバミ・モノアラ介かと推定さるゝ淡水介らしき印像が出る。團塊をなせる粘土中には保存の稍々良好なるものもある。其後、同地附近より發掘したと稱して、魚骨の小脊椎骨片・鯨の鰭らしき角質骨片・魚類の齒らしき片を送られたるも發掘者の談と現状とより推定せば象牙化石の存在せし部分よりは少しく上層位の地層より產出したるものらしい。

この象牙の存在せし粘土層は、曾て本誌第六卷第三號に

大阪府豊能郡麻田村産舊象牙化石と其の層位

### 第 一 表

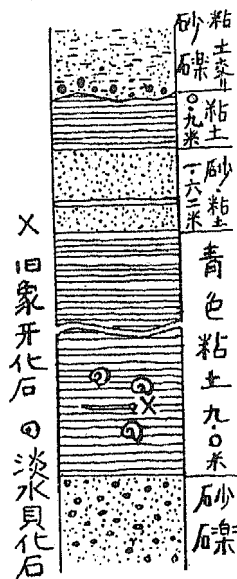
象 牙 破 片 大 き さ の 測 定

破片番號	長さ(糎)	横斷面(糎)		周囲(糎)	備 考
		長徑	短徑		
1	25.5	5.3	4.5	15.5	斷面卵形に近し
2	11.0	6.3	5.3	17.7	同
3	20.4	6.8	6.3	20.7	斷面擬三角形に近し
4	10.0	7.3	7.3	24.4	斷面圓形に近し
5	11.0	7.7	7.7	26.8	同
6	12.0	9.0	9.0	23.2	同
7	33.0	9.3	9.3	29.3	同

記載されたる西宮香櫨園附近の粘土層（相接近してセタシバミ等淡水介と、テリナ其他鹽水介とを

第三圖

象牙發掘地の地層



産する地層——池邊氏は本誌二十卷第四號に西宮介層と呼ぶる」と類似し、更に西方の神戸市・舞子等の介層と近似するものである。

螢ヶ池附近には處々に青色粘土層の露出を見、刀根山療養所の東方には成層極めて

明瞭なる露出があつて走向北三十度東、東南に入度、又は走向北十度東、東南に六度の傾斜を有して居る。青色粘土層の上には厚さ四十七糎の褐色砂層、二・五糎の白色粘土層、〇・九米の褐色砂層があり、褐色砂層は花崗岩質にして、雲母を含み、乾燥せば白色を呈するを以て銀砂と呼んで居る銀砂上には〇・九米の粘土層が整合に存在する（第三圖）。

本累層上には偽層に富める粘土混り砂礫層があつて、走向は確實ならざるも、東西に走り北に四度の傾斜を有する部分を測定した。酸化鐵に富み、黄褐色を呈し、北方に至るにつれて厚きが如く螢ヶ池西方にては高師小僧が生成して居る。高師小僧につきては君塚學士の記述がある。

要するに、今回發掘の象牙は層位は大體明かであるが牙のみであつて、種屬名を決定し難い。但し、石化の程度と象牙のカーブ等から見ればナマデカスにも似て居るが、何分牙のみであるから、ステゴドンでないとも斷定は出來ない。

今後、白齒の發見さるゝことあらば明瞭になるであらう。何れにしても石川・宮竹兩氏が捨て去られんとした化石を聚集し、之を保存されたことに對しては謝意を表する。(完)

## カナダのヴィクトリアと其附近

槇 山 次 郎

今夏六月一日より三日まで英領コロンビア州の首府ヴィクトリアで第五回太平洋學術會議の一部が行はれた。會議は五日以後十四日までヴァンクーヴァーに移つて續行せられた。其後で旅行がありロッキー山を越してアルバータ州の方まで行つたが其時の事や會議の模様等は別に報ずる事として此處ではヴィクトリア附近で見聞した事の中から抜書して御目にかける。

船の都合で私は會の始まる十日前にヴィクトリアに着いた。日本から參加した多くの會員は郵船會社の船で早く出發されシアトルに滞在さ

れた。行を共にするを得なかつた私は唯一人米國郵船のプレジデント・クリーヴランド號に五月十三日に横濱で乗船した。乗つて見ると意外にも同會議に行かれる山本一清博士が居られた。博士は他の船の筈であつたが急に昨日になつて此船に變へられた由にて幸にも同行が出来嬉しかつた。船は一日に四百四十哩の速度で走つたが、横濱を一時間も後に出帆したカナダ太平洋汽船のエムプレス・オブ・エーシアに途中で追ひ越された。それでも二十二日朝早くヴィクトリアの港外に到着し、米國汽船の太平洋横斷